

達したものは思われない。

大正十年頃大西玉子がキングレコードに吹きこみ、文部省の検定済になり、後に小唄勝太郎がビクターレコードに吹きこんで当ってから、全国的に普及した。そして、それが何時か会津磐梯山という名になり、小原庄助さんのような合いのでの囃子言葉までついて、その庄助が実在の人だとか、そうでないとかの論議まで生むに至っている。普及し、有名になったことは有難いが、甚句、かんしょ踊歌には、もつと民謡としての個性に富んだ、哀調もかみしめられる、郷土的な味の深い調子のものであったように思う。

4、大津絵・長持歌その他 大津絵は勿論近江の大津から起ったものとされている。大津絵を浮世絵師の吃の又平が街頭を売り歩いたのを、文化年中に歌に詠んだものであるという。これが会津にはいったのは、天正十八年（一五九〇）蒲生氏郷が江州日野より移したものであるとも伝えてある。しかし会津大津絵の名歌といわれる「楽しみも、悲しみも、嬉しきことも憂きことも……」は文久年間（一八六一～一八六三）東山の遊廓の某楼主が贖札をつくって入牢中、ざんげして歌ったものであるともいつている人がある。

その他、よく歌われているものに会津長持歌がある。各地でもやや調子をかえてよく聞かれるが、婚礼の長持かつぎで若者がよく歌った。これも長持かつぎという仕事が変われようとしているので、何時まで歌いつがれるものであろうか。

その他松坂などの名調子ものもあるが、流行歌に圧倒されて、引きつぐのは容易であるまいと思う。ラップ節、さのさ節、おいとこ節、ぱっぱ節、有明節、どんどん節、おぼこ節などが、流行してきては消えていった流れがある。